

ライトニング・トーク 発表要旨

中部ジャワ・カトリック教会とナショナリズムの関係について

The Relationship between the Catholic Church and Nationalism in Central Java

織田 悠雅 (上智大学)

ORITA Yuga (Sophia University)

本発表では、中部ジャワ州とジョグジャカルタ特別州にまたがる、スマラン大司教区のカトリック教会とナショナリズムの関係性を対象とした研究計画について報告する。

インドネシアでは、2005年頃から宗教的少数派に対する攻撃が目立ち始めた(茅根2018, 207)。本研究対象地域でも、2018年2月にジョグジャカルタ特別州でイスラーム過激派による教会襲撃事件が発生しており、宗教間の緊張関係が垣間見える。一方、当地域で多数派であるイスラームと少数派であるカトリックの両信徒間では、信仰の違いを超えてレバランやクリスマスを相互に祝う習慣などが確認され、両者は必ずしも敵対的な関係ではない。

また、カトリック教会とナショナリズムの結びつきを見ると、現地人として初めて大司教となったスギヤプラナタ司祭は「100%カトリック、100%インドネシア」という言葉を残し、独立戦争時にはカトリック教会として独立を支持した(Aritonang and Steenbrink 2008, 705-706)。こういったナショナリズムとの関係は現在まで残っており、発表者が2022年9月に行った予備調査では、ジョグジャカルタ特別州内のA小教区において、イスラーム過激派の活動への対抗を目的とした、ミサ前の国歌斉唱という現象も見られた。

このように当地域のカトリック教会とイスラームは必ずしも対立的ではないが、そこには一定の緊張関係も存在する。そして、カトリック教会は自身の生存戦略としてナショナリズムを活用していることが推測できる。以上の背景から、修士論文ではカトリック教会が少数派として存続するための戦略について、ナショナリズムの活用という視点に立ち、文献資料調査と実地調査を組み合わせた分析を行う。さらに、カトリック教会とナショナリズムの関係性だけでなく、ジャワ文化との関係性も視野に入れて研究を行う予定である。本発表では、この研究計画について、①研究背景、②研究内容・進捗、③研究における課題、という3点の報告を行う。

(文献)

茅根由佳「現代インドネシアにおける宗教的少数派抑圧のメカニズム：マドゥラ島サンパン県のシーア派追放事件を手がかりに」『イスラーム世界研究』第11巻、2018年、207-224頁。

Aritonang, Jan Sihar and Karel Steenbrink, *A History of Christianity in Indonesia*, Leiden/Boston: Brill, 2008.